

ア タ イ 遺 跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第21集

1986

津山市教育委員会

序

アタイ遺跡は津山市野介代地内の宅地造成事業に伴ない発掘調査された遺跡であります。調査に至る経過については本文中に詳しく述べられているとおりであります。開発と保存という全く相反する行為の溝の深さを改めて痛感させられた思いがします。幸い原因者である有限会社中央建設代表取締役三船勝之氏の積極的な御理解と御協力でどうにかこの深い溝を埋めることができました。

調査の結果、弥生時代中期の住居址を1軒検出した程度で他に特筆に値するような大発見はございませんでしたが、しかし、いずれも貴重な文化財であります。今後共、我々の祖先が長い歴史の中で残した人間の営みの蓄積である貴重な文化遺産を軽視することなく、後世に継承すべく文化財保護行政を進めてまいりたいと思っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にいたるまで多大の御協力をいただいた中央建設三船勝之氏をはじめ作業員の方々、並びに株式会社中央測量の関係者各位に対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

昭和61年3月31日

津市教育委員会教育長 福島祐一

目 次

I 立地と周辺の遺跡	1 住居址.....	6
1 遺跡の位置と立地.....	2 不明遺構.....	7
2 アタイ遺跡と周辺の遺跡.....	3 段状遺構.....	8
II 調査の経過	4 道路・溝.....	10
1 調査経過.....	5 土壌・ピット.....	11
2 調査体制.....	IV まとめ.....	14
III 調査の記録		

例 言

1. 本書は有限会社中央建設が計画した宅地造成事業に伴うアタイ遺跡発掘調査報告書である。
1. 発掘調査にかかる経費はすべて原因者である(前)中央建設の負担によるものである。
1. 発掘調査は津市教育委員会社会教育課主事行田裕美が担当した。
1. 発掘調査作業には(前)中央建設、測量作業には(前)中央測量の方々の協力を得た。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また方位は磁北である。
1. 本書第1図は建設省国土地理院発行5万分の1(津山市東部)を複製したものである。
1. 本書第5図の遺構略称はS H:住居、S X:不明遺構、S T:段状遺構、S F:道路、S D:溝、S K:土壌、P:ピットである。
1. 本書の執筆と編集は行田が担当した。

I 立地の周辺の遺跡

1 遺跡の位置と立地（第1～3図）

アタイ遺跡は岡山県津山市野介代 524—5番地他に所在する。津山駅から県道大篠～停車場線を北上し、中国縦貫自動車道と交差する手前、津山市志戸部地区で東方向に市道692号線に歩をとると低丘陵にさしかかる。さらに歩を進めると中国縦貫自動車道を高架橋で通過し、東方向へと通じている。しばらく進むと、大きく南方向へとカーブし再び中国縦貫自動車道と交差する。遺跡はちょうどこの交差点の北西側に隣接する。津山盆地の地形には中国山地から南に樹枝状に派生したいくつもの低丘陵が顕著にみられるのであるが、本遺跡が立地する丘陵もまさにこの中の一丘陵に相当するものである。調査区は頂部から北西方向に緩やかに傾斜した地形である。頂部からは北側に中国山地の分水嶺、北西眼下には志戸部平野、南西方向には津山市街地の一部も視界にことができる。北西方向志戸部平野には肥沃な水田地帯が広がっており、遺跡の眼下にまで水田が開拓されている。しかし、最近では宅地化の波が押し寄せ、水田がだんだんと姿を消し、かつての閑かな田園風景は急速に失なわれつつある。調査前の遺跡は竹林であった。

2 アタイ遺跡と周辺の遺跡

（第1図）

本遺跡の位置する丘陵は、東側の押入西遺跡等が所在する丘陵、西側の沼遺跡等が所在する丘陵に比べ非常に遺跡の密度の低い丘陵である。発掘調査例としては、中国縦貫自動車道建設に伴うもので、弥生時代中期集落の野介代遺跡があげられている程度である。

押入西遺跡は弥生時代中期から奈良時代にかけての複合遺跡である。中でも弥生時代中期の集落は興味引かれるものであり集落研究に貴重な資料を提供するものと考えられ



- | | | |
|-----------|------------|-----------|
| 1 大田十二社遺跡 | 6 アタイ遺跡 | 11 狐塚遺跡 |
| 2 京免遺跡 | 7 野介代遺跡 | 12 六ツ塚古墳群 |
| 3 竹ノ下遺跡 | 8 正仙塚古墳 | 13 玉琳大塚古墳 |
| 4 沼遺跡 | 9 押入西遺跡 | |
| 5 沼E遺跡 | 10 佐綱神社古墳群 | |

第1図 アタイ遺跡と周辺主要遺跡分布図 (S = 1 : 50,000)

る。周辺の主要遺跡としては飯綱神社古墳群、六ツ塚古墳群、玉琳大塚古墳などの古墳の他に、6世紀末～7世紀初頭の製鉄関連遺跡である狐塚遺跡がある。

沼遺跡は弥生時代中期から後期にかけての集落遺跡である。日本考古学史上不可欠の遺跡であり、特に集落研究、史跡公園史上著名である。周辺の主要遺跡としては、沼遺跡と同様丘陵に立地する遺跡として沼E遺跡、大田十二社遺跡、平野部に立地する遺跡として京免遺跡、竹ノ下遺跡がある。いずれも弥生時代中期から後期にかけての時期の遺跡である。

アタイ遺跡周辺主要遺跡参考文献一覧

地図番号	遺跡名	参考文献
1	大田十二社遺跡	河本清・中山後紀・安川史・行田裕美「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会1981年
2	京免遺跡	中山俊紀「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集』津山市教育委員会1982年
3	竹ノ下遺跡	。
4	沼遺跡	近藤義郎・渋谷泰彦編「津山弥生住居址群の研究」津山市・津山郷土館1957年
5	沼E遺跡	河本清・柳瀬昭彦「沼E遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告9』岡山県教育委員会1978年 中山俊紀・行田裕美「沼E遺跡Ⅱ」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集』津山市教育委員会1981年
6	アタイ遺跡	本青
7	野介代遺跡	河本清・橋本聰司・柳瀬昭彦「野介代遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会1973年
8	正仙塚古墳	濱哲夫「高野山西正仙塚古墳」『津山市文化財報告1』津山市教育委員会1975年 「高野山西正仙塚古墳」『津山の文化財』津山市教育委員会1983年
9	押入西遺跡	河本清・橋本聰司・下沢公明・井上弘・柳瀬昭彦「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会1973年
10	飯綱神社古墳群	橋本聰司・柳瀬昭彦「押入飯綱神社古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』岡山県教育委員会1973年
11	狐塚遺跡	河本清「狐塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集』津山市教育委員会1974年
12	六ツ塚古墳群	今井亮「六ツ塚古墳群調査略報」『津山市文化財調査略報3』津山市教育委員会1962年 。
13	玉琳大塚古墳	今井亮「六ツ塚1号墳調査略報」『津山市文化財調査略報7』津山市教育委員会1966年 。
		「津山市川崎玉琳大塚調査報告」『津山市文化財調査略報第1集』津山市教育委員会1960年

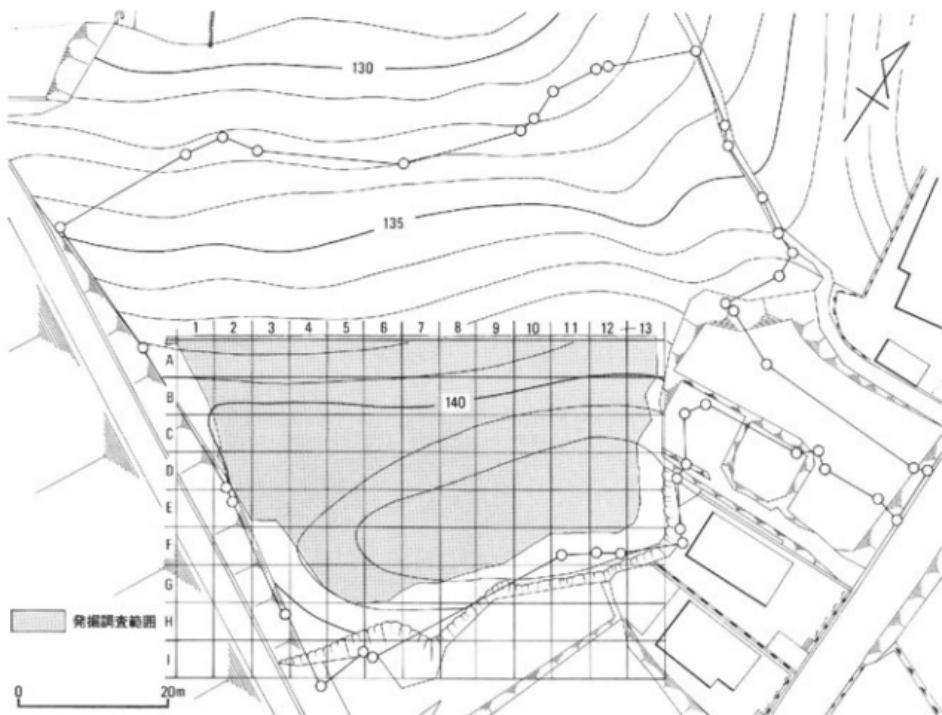


第2図 遺跡遠景（西から）

II 調査の経過

1 調査経過

昭和60年3月27日付けで、久米郡中央町打穴西 624-4番地有限会社中央建設代表取締役三船勝之氏から岡山県津山地方振興局長あてに、津山市野介代 524-5番地他14筆、面積4,913m²にかかる「宅地造成に関する工事の許可申請書」が宅地造成等規制法第8条第1項にもとづき提出された。対象地は津山市遺跡地図No.322として登録されている周知の遺跡である。このため、原因者である三船勝之氏から昭和60年4月12日付けで、文化財保護法第57条の2にもとづく「埋蔵文化財発掘届」が提出された。同時に、「埋蔵文化財確認調査依頼書」も提出され、同日付けで、「開発事業の実施に伴う埋蔵文化財確認調査に関する覚書」を締結し、確認調査を実施することとなった。



第3図 地形測量図及びグリッド配置図 (S=1:750)



第4図 調査区全景（東から）

確認調査は4月25日、バックホーを借り上げ実施した。調査の結果、住居址、段状造構等を検出し、遺跡はほぼ全域に拡がっていることが判明した。このことから、全面発掘調査を余儀なくされた。本調査にあたっては7月12日付けで、再度「開発事業の実施に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」を締結し実施した。工事対象面積は4,913m²であるが、工事事業計画では丘陵の頂部を削平し、谷部を埋め立てる工法となっており、このため切土部分約1,700m²を調査対象とした。

表土剥ぎは事前にバックホーを借り上げ済ませておいたので、直接遺構検出作業から着手した。グリッドは5m×5mで任意に設定した。遺構の当初の予想に反し、密度が極めて薄く作業は順調に進み、7月27日には全ての作業を終了した。

2 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記の通りである。

発掘調査主体 津山市教育委員会

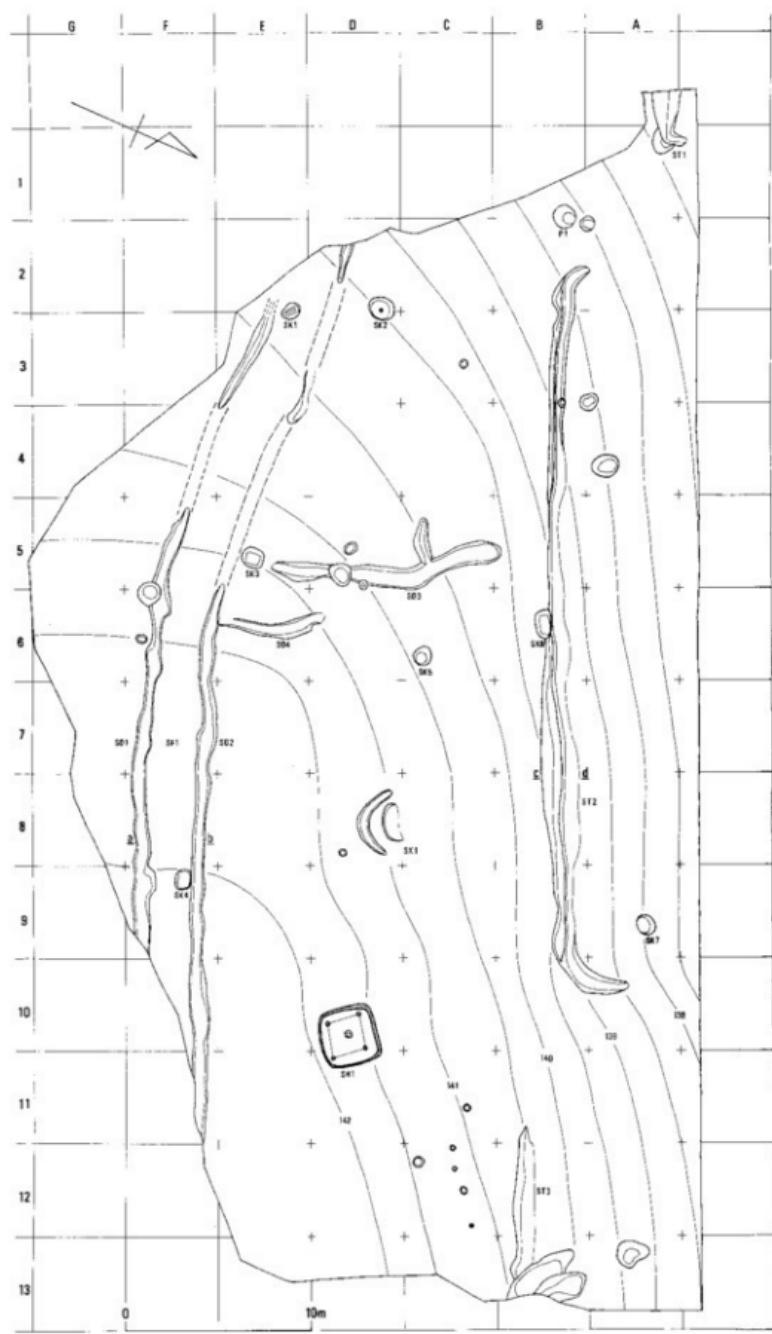
教育長 福島祐一

教育次長 藤田公雄

参事兼社会教育課長 内田康雄

文化係長 緑山三千穂

主事 行田裕美（調査担当）



第5回 造構配置図 ($S = 1 : 300$)

なお、発掘調査にあたっては(㈲中央建設代表取締役三船勝之氏をはじめ、中央建設の作業員の方々、地形測量及びグリッドの杭打ち作業には㈱中央測量の田口文彦、中山正知、坂本直広、中原徹雄氏の多大な御協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

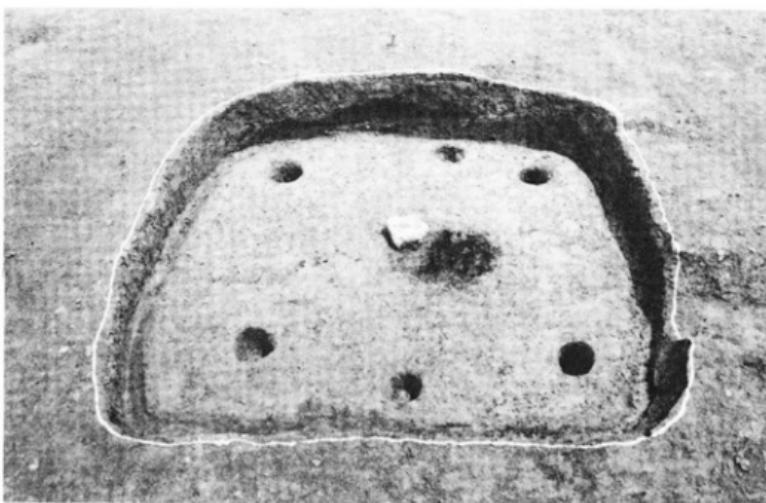
III 調査の記録

1 住居址

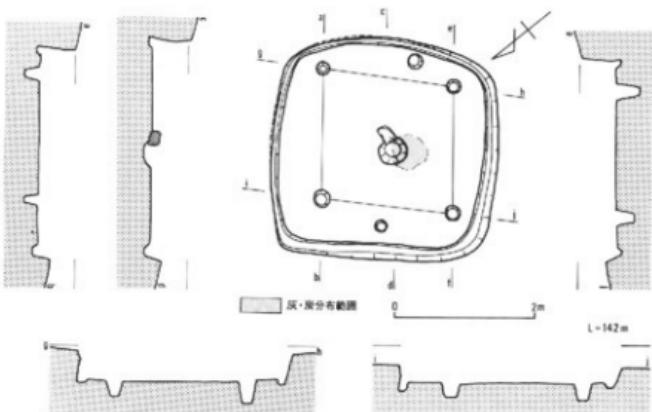
1号住居址（第6～8図）

調査区の南東部、丘陵のほぼ頂部に位置する。1辺約3mを測る隅丸方形プランを呈す住居址である。住居壁南東辺は他の3辺に比べゆるやかではあるが弧状を呈している。さらに、壁はホーバーハングした状態であり、壁溝は上位の壁面より奥に入り込んでいる。柱穴は各コーナーにほぼ等間隔に配されている。深さは浅いもので約20cm、深いもので約30cmを測る。床面の中央部には中央穴が位置する。中央穴は径約40cm、深さ約10cmを測る。中央穴の南西側には径約50cmを測る円形の範囲に、中央穴からかき出したような状態で灰と炭の分布が顕著に認められた。しかしながら、中央穴壁面に焼土を確認することはできなかった。中央穴を有す住居址を調査する機会に良く恵まれるが、今だ焼土を確認した例を経験していない。

遺物としては数点の土器片と中央穴に接して台石状の石が出土しただけである。土器片はい

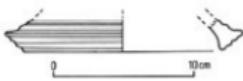


第6図 1号住居址（北西から）



第7図 1号住居址平面・断面図 ($S = 1 : 80$)

それも埋土中の出土である。小片ばかりで図示し得たものは1点だけである。高杯形土器脚部である。外面及び端面には凹線文が施されている。色調は赤褐色を呈し、胎土は砂質に富んでいる。弥生時代中期後半の所産と考えられる。

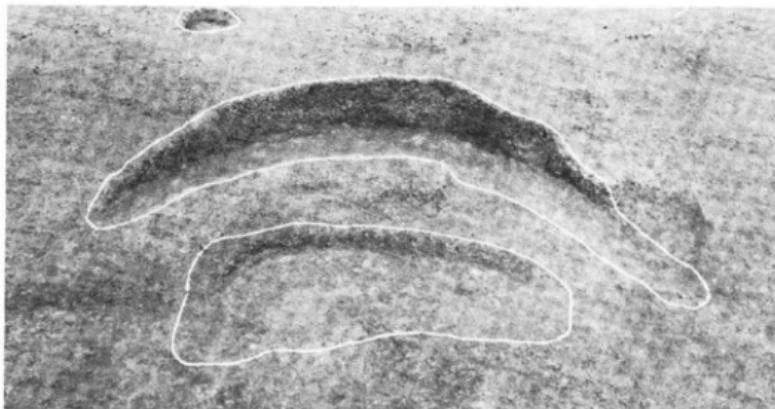


第8図 1号住居址出土遺物実測図
($S = 1 : 4$)

2 不明遺構

1号不明遺構 (第9~11図)

調査区中央部、1号住居址の西方に位置する。丘陵斜面上位側に半円状に溝がめぐり、下位



第9図 1号不明遺構 (北西から)

側に溝に開まれる
ように、長さ約2m
幅約80cmを測る方
形の平坦面が位置
する。溝の幅は40
~60cm、深さは最
も深いところで約

35cmを測る。埋土 第10図 1号不明造構平面・断面図 ($S=1:80$)

は一層であり、同じ土層が両者を覆っていた。このことから別遺構ではなく、共存するものと
考えた。埋土中には多量の炭化物片が認められた。

遺物としては、溝の中央部床面近くより数点の弥生土器片が出土しただけである。図示し得
たものは2点だけである。1は斐形土器口縁部である。遺存状態が極めて悪く口縁端面は剥落
しているが、わずかに2本の回線文が認められた。色調は内外面とも暗褐色を呈し、胎土は砂
質に富む。2は壺形土器底部と考えられる。外面は縦方向のヘラ磨き、内面には指頭圧痕が観
察された。また、内面上位にはススの付着が認められた。色調は外面が黒褐色、内面が暗褐色
を呈し、胎土には1mm大の砂粒を多量に含む。

3 段状造構

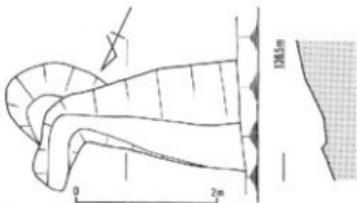
1号段状造構（第12・13図）

調査区北西コーナー部に位置する。道路境界側は工事の都合上未調査である。等高線走向に



第12図 1号段状造構（東から）

沿って浅い溝が延び東端で北側に直角に曲がる。溝底面幅は20~60cm、上端
幅は0.5~1.5mを測る。上端からの深さ
は約30cmを測る。北東コーナー部に浅
い円形を呈す張り出し部が認められた
が、これは本段状造構に付設するもの



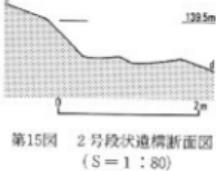
第13図 1号段状造構平面・断面図 ($S=1:80$)

ではなく、円形土壙が切り合っているためである。両者とも遺物の出土がなく時期不明である。

2号段状遺構（第5・14～17図）

調査区北側、斜面下方に等高線走向に沿って細長く位置する。長さは39.5mを測る。東西両端は「L」字状に曲がり、そのまま斜面下方へ延び消滅する。両端部は溝状を呈すが、中央部は1段あるいは2段の段状を呈す。中央部で6号土壙と切り合う。切り合い関係は6号土壙の方が新しく、2号段状遺構の方が古い。

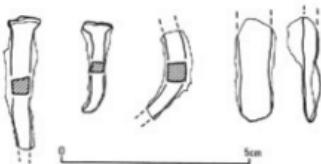
遺物としては、備前焼攢鉢、壺等の他に、灯明皿、湯呑、盃等の染付を含む日常雑器である陶磁器類が多量に出土した。また、鐵器類として角釘4本、クサビ状鉄器1点、鐵滓2点が出土した。



第15図 2号段状遺構断面図
(S=1:80)



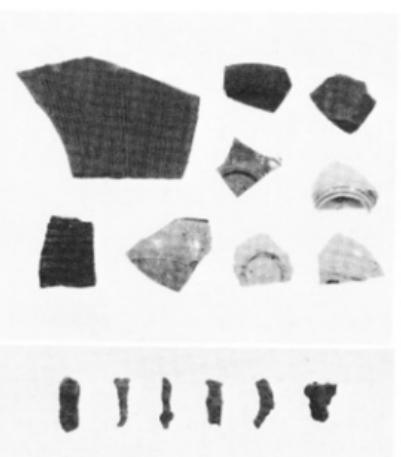
第14図 2号段状遺構（南西から）



第16図 2号段状遺構出土遺物実測図 (S=2:3)

3号段状遺構（第18～20図）

調査区北東部に位置する長さ約8m、幅約1mを測る段状遺構である。丘陵斜面を断面「L」字状に削平し、平坦面を形成している。平坦面には溝、柱穴とも検出されなかった。等高線走向にほぼ平行する。東端は後世の擾乱により消失している。上端と平



第17図 2号段状遺構出土遺物

坦面との比高差は約40cmを測る。

遺物としては、土師質土器、備前焼摺鉢、徳利、染付等の陶磁器類が出土した。他に鉄滓1点、近世と思われる瓦も出土している。

4 道路・溝

1号道路、1・2号溝

(第5、21~23図)

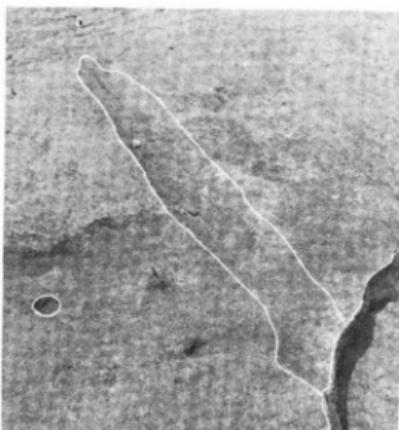
調査区南側を横断する状態で検出された。

1・2号溝は道路の側溝にあたる溝で、ほぼ平行に走っている。溝上面幅は平均で約70cm、底面幅は約40cm、深さは約15cmを測る。道路面は重機で表土剥ぎを実施したためか何も検出できなかった。

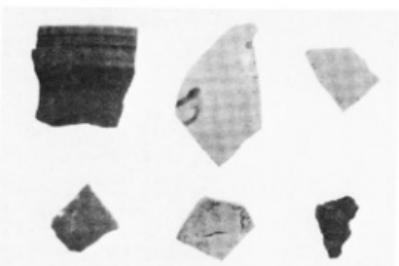
遺物は側溝からの出土である。抹茶茶碗を含む磁器類をはじめ、青海波文を有す須恵器片、勝間田焼と考えられる丸瓦片等が出土した。

3・4号溝(第24~26図)

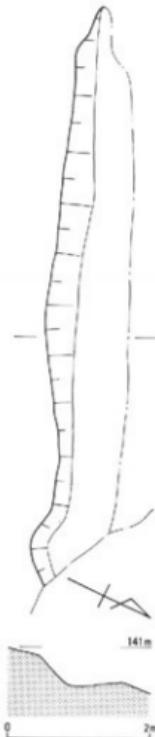
調査区中央や西寄りに位置する。1号道路の北側溝にあたる2号溝に直交して北方向に走る。3号溝と4号溝との距離は1号道路幅にはほぼ相当する。従って、1号道路から分岐する道路の側溝とも考えられるのであるが、両者の溝とも谷部に向ってい



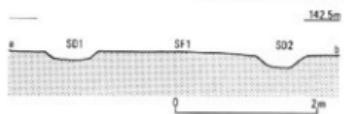
第18図 3号段状造構(東から)



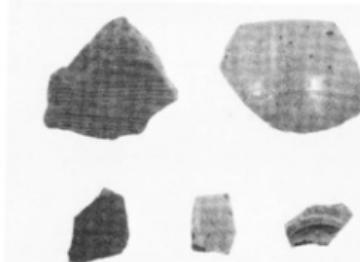
第20図 3号段状造構出土遺物



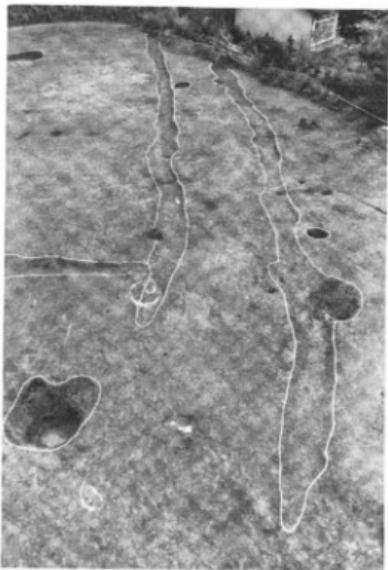
第19図 3号段状造構平面・断面図(S=1:80)



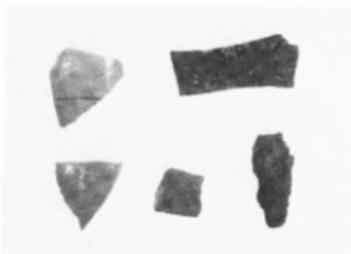
第21図 1号道路、1・2号溝断面図(S=1:80)



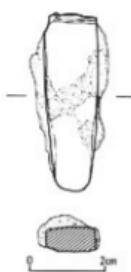
第22図 1・2号溝出土遺物



第23図 1号道路、1・2号溝（西から）



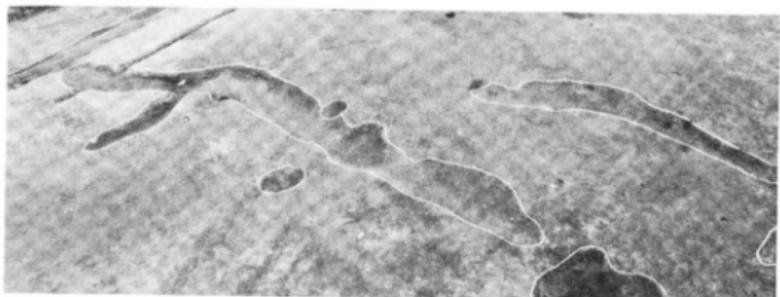
第24図 3号溝出土遺物



第25図 3号溝出土
遺物実測図 ($S = 2 : 3$)

ること、4号溝北端が平行ではなく西寄りにカーブしていることなどから道路側溝ではなく、それ単独の溝と考えた。

遺物は3号溝だけの出土で、4号溝からは出土しなかった。磁器類の他に、図示した鉄製のクサビがある。

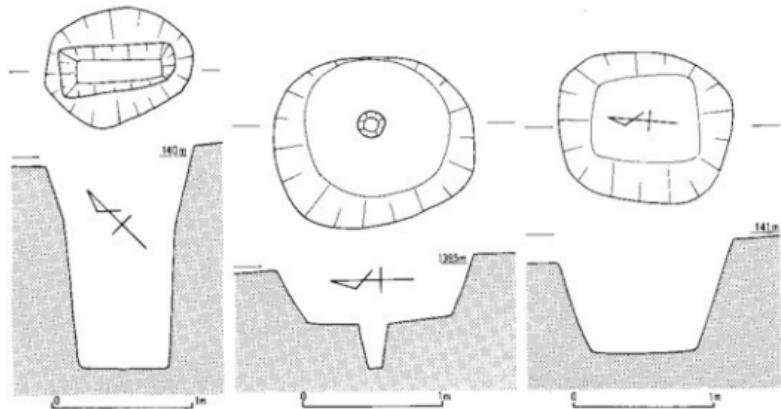


第26図 3・4号溝（南西から）

5 土壌・ピット

1号土壌（第27・34図）

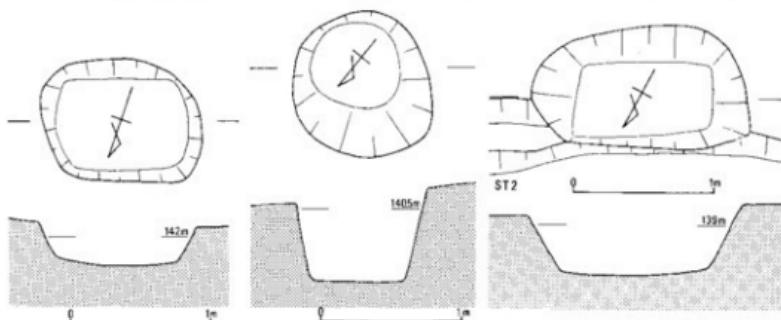
調査区西侧1号道路上に位置する。掘形は長径約1m、短径約80cmを測る楕円形を呈す。遺構確認面から約50cm下がったところから、2段に掘り込まれており、底面は長方形を呈す。底面までの深さは約1.6m、幅は約15cmを測り、非常に幅が狭く深い土壌である。遺物は出土しなかった。性格は不明である。



第27図 1号土壤平面・断面図
(S = 1 : 40)

第28図 2号土壤平面・断面図
(S = 1 : 40)

第29図 3号土壤平面・断面図
(S = 1 : 40)



第30図 4号土壤平面・断面図
(S = 1 : 40)

第31図 5号土壤平面・断面図
(S = 1 : 40)

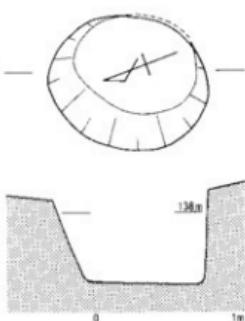
第32図 6号土壤平面・断面図
(S = 1 : 40)

2号土壤 (第28・35図)

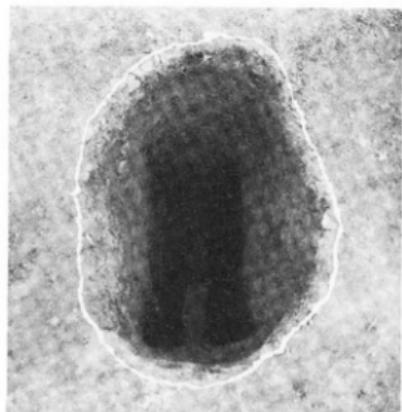
調査区西侧 1号土壤の北方に位置する。長径約1.4m、短径約1.2mを測る楕円形を呈し、底面には径約20cm、深さ約30cmを測るピットが中央部に位置する。遺物は出土しなかった。この種の遺構からはしばしば石礫が出土することなどから、陥し穴と考えられているものである。

3号土壤 (第29・36図)

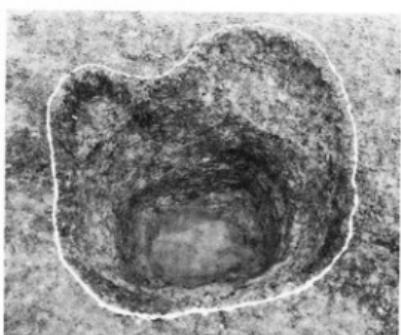
調査区中央部やや南寄り、3号溝の南端に位置する。掘形は長軸約1.2m、短軸約1mを測る隔丸方形プランを呈す。深さは



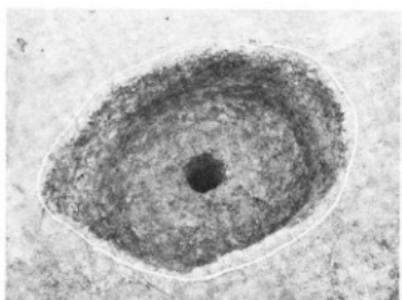
第33図 7号土壤平面・断面図
(S = 1 : 40)



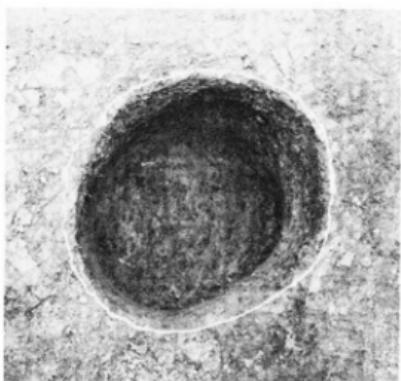
第34図 1号土壤（北西から）



第36図 3号土壤（西から）



第35図 2号土壤（北西から）



第37図 7号土壤（西から）

平均約70cmを測る。埋土上面には挙大の円礫が敷詰められていた。遺物は全く出土しなかった。

4号土壤（第30図）

調査区南側2号溝に接して位置する。掘形は長軸約1.1m、短軸約85cmを測る隅丸方形プランを呈す。深さは平均約30cmを測る。3号土壤同様、埋土上面には多量の挙大の円礫が敷詰められていた。遺物は出土しなかった。

5号土壤（第31図）

調査区ほぼ中央部3号溝の東側に位置する。掘形は径約1mを測る不整円形プランを呈す。深さは平均約60cmを測る。遺物としては埋土中より、近世と考えられる瓦片、土師質土器片1点ずつが出土した。

6号土壙（第32図）

調査区中央部北側2号段状造構と切り合って位置する。切り合い関係は6号土壙の方が新しく、2号段状造構の方が古い。北壁は残存しないが、復元すると掘形は長軸約1.5m、短軸約1mを測る隅丸方形プランになる。深さは中央部で約50cmを測る。3・4号土壙同様、埋土上面には最大の円礫が充填されていた。遺物は出土しなかった。

7号土壙（第33・37図）

調査区北側斜面下位に位置する。掘形は長径約1.1m、短径約90cmを測る楕円形プランを呈す。斜面上位側の壁はやや奥に入り込んでいる。深さは中央部で約60cmを測る。遺物は出土しなかった。

B-2区1号ピット（第5・38図）

調査区西側2号段状造構の西方に位置する。径約1.2m、中央部での深さ約10cmを測る浅い皿状の円形ピットである。斜面に位置するため下方側の壁は残存しない。

図示した遺物は口径8.8cm、高さ1.7cmを測る土師質の小皿である。この小皿は灯明皿に使用されたもので口縁部内外面にススの付着が観察される。他に磁器片1点、瓦片が数点出土した。



第38図 B-2区1号ピット出土遺物
実測図 (S=1:2)

IV まとめ

本遺跡の調査からは資料的に多くを語れるものはない。住居址も弥生時代中期後半に属するものが1軒だけであり、集落を論じられるものではない。しかし、沼遺跡をはじめとしくいくつかの遺跡すでに報告されているように(註1)、弥生時代の集落は数軒の住居から構成されることが多い。特に弥生時代中期に限ってみても、隣接の野介代遺跡(註2)もそうであったように数軒の住居より構成される集落が丘陵上に営まれているのである。後期集落との相異は立地の点で明確となる。すなわち、後期集落は丘陵上だけでなく平野部にも営まれるのに対し、中期集落はほとんどが丘陵上に営まれるということである。それも津山盆地の周辺に接する丘陵上には普遍的に認められるようであり、集落が丘陵単位ひいては谷水田単位に散在していたようである。このことから考えると、調査区の南側、現在は中国縦貫自動車道によって切られているが、この付近にかけて1号住居址を含む集落が存在したものと推測される。

2号土壙は通常陥し穴と考えられている遺構である。西吉田遺跡をはじめ最近調査例が増えている(註3)。本地域では墳底面のピット数は1ヶの場合がほとんどであるが、稀に西吉田

遺跡土壌15例のように2ヶのものもある。

1号道路としたものは、10数年前までは道の痕跡もはっきりしていたらしい。その後、中国総貫道の建設で通行も途絶え、調査前は雑木まじりの竹林と化しており当時の面影は全く失なわれていた。調査前は道の所在さえも定かでなかった。調査後、通称“赤線みち”と呼ばれているものであることを確認した。

2号土壌以外の土壌は土壌墓である。調査区内に散乱していた江戸時代の石碑文もこのことを裏付けるものである。他に犬の骨、大型動物の骨も検出させたことから、この地が墓地として使用されていたことを証明するものである。

段状遺構については、時期的には土壌・溝等とほぼ同じような時期と考えられるが、その性格については全く不明であると言わざるを得ない。

(註1) 沼遺跡をはじめ岡山県教育委員会が発掘調査を実施した、天神原遺跡、押入西遺跡、野介代遺跡、津山市教育委員会が発掘調査を実施した大山十二社遺跡、沼王遺跡、押入西遺跡、西吉山遺跡などがあげられる。中期と後期の違いはあるが、いずれも数軒の住居より構成される集落である。

(註2) 河本 清、橋本惣司、柳瀬昭彦「野介代遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会1973年

(註3) 西吉山遺跡では4基、現在、津山中核工業団地建設に伴う発掘調査で調査中の一貫西遺跡では約30基、一貫東遺跡でも数基が確認されている。

ア タ イ 遺 跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第21集

昭和61年3月31日発行

発行 津山市教育委員会

岡山県津山市山北520

印刷 有限会社 弘文社

岡山県津山市川崎168
